中 部 産業遺産 研 寮 会

中部產遺研会報

Vol. 86 2022/04/15

Newsletter of The Chubu Society For The Industrial Heritage

産業遺産紹介 IH-CSIH-063 旧志津川発電所

所在地:京都府宇治市槇島町槇尾山

琵琶湖から流れ出す瀬田川は、京都府に入るあたりで宇治川と名を変えるが、その豊富な水量を利用して電力を得る計画は古くからあり、宇治川電気によって、1924(大正13)年に大峯ダム(堤高31m)および志津川発電所(認可最大出力3.2万kW)が建設され、発電を開始した。大峯ダムは、日本初のコンクリート高堰堤ダムであり、また、日本で初めてラジアルゲートを採用したダ



[写真1] 旧志津川発電所

(2015/06/14 筆者撮影)



[写真2] 旧志津川発電所の上部水槽 (2015/06/14 筆者撮影)

ムであった。写真1から分かるように、旧志 津川発電所は二棟からなり、川に近い棟には 発電設備が、山側の棟には配電/変電設備が 納められていた。

しかし、1953(昭和28)年8月の南山城水害、および同年9月の台風13号豪雨により、宇治市に多大な被害が発生したため、宇治川を含む淀川水系において、根本的な治水対策が計画され、1964(昭和39)年には、志津川発電所のすぐ上流に天ケ瀬ダム(堤高73m)が建設された。これにより、大峯ダムと志津川発電所の取水口は水没することとなり、同年に稼働停止した。 (文・写真:大野泰伸)

中部產遺研会報 第86号 目次

-	1.	産業遺産紹介/大野泰伸	1
4	2.	人造石の産業遺産を歩く(11)/天野武弘	2
•	3.	【短信】台北二二八公園のラジオ塔/藤井建	9
2	4.	【産業遺産情報】消滅の危機せまる赤煉瓦水路/天野武弘	10
Ę	5.	第170回定例研究会の概要/八田健一郎	10
(6.	第171回定例研究会・見学会の感想/市原猛志	14
-	7.	第30回総会・第172回定例研究会の案内/第173回定例研究会の案内	16
8	8.	シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第39回の案内	16
(Q.	2022年度任今費 編集後記 百稿草集	16

人造石の産業遺産を歩く(11):服部長七の人造石工法(長七たたき) —全国に点在する人造石遺産— 田原市、旧丸一新田の人造石遺産

Artificial Stones by Hattori Choshichi and Method of Construction:

(11) Artificial Stone Structures as Industrial Heritage in Former Maruichi Shinden of Tahara City

天野武弘/ AMANO, Takehiro

Key Words; Artificial Stones, Choshichi-Tataki, Hattori Choshichi, Industrial Heritage

1. はじめに一偶然の発見から一 たはよ

2018 年 5 月の連休の最中、田原市童浦地区にあるかつて新田だったと言われる田原湾の海辺に案内された。この地区に詳しい田原市教委の方の案内であった。このとき、今回紹介する人造石護岸の痕跡を発見することとなった。

それはまったくの偶然であった。といってもこの 発見は、あとでも述べるが、同じ童浦地区にある波瀬 町の願照寺の人造石擁壁及び、この地区で昔から使 われていたと言われる「たたき」(三和土)の原料と なる種土の採掘場所を案内頂いた際に、ついでに立 ち寄ったときのことであった。

この海辺一帯は、干潮時には薄筋を除き約 280 へクタールの広大な干潟が現れるところである。今では汐川干潟と呼ばれ、全国有数の渡り鳥飛来地として知られている。ここはまた、豊川、梅田川、汐川などから田原湾に流れ込む土砂によって遠浅となり、大洲崎や大津島と呼ばれる巨大な州が出来上がって



図1 田原湾の干拓 (『古地図で楽しむ三河』p147の図(部分)に加筆)

もいた。 ここの 大量の 土砂が、 近くの 牟 呂 沖 に明治 時代に できた 神野新 田の干 拓堤防 新田 に使わ れ、戦 汐川干潟 後は、 トヨタ 自動車 田原工

図2 海面に残る旧丸一新田とその周辺 (国土地理院地図に加筆)

する臨海工業地帯となる埋立地造成を容易にしたことにも繋がる。

こうした大量の州で囲まれた田原湾は、図 1 に見るように、1600 年代後半頃から新田開発が盛んに行われた地でもあった。

案内された沙川干潟を一望したとき、海と干潟を分けるように存在する大きな囲いに目が止まった。 所々に切れ目はあるが、事前にここが新田跡と聞い ていたこともあって、干拓堤防の痕跡を示すものと 判断できた。満潮時には図 2 のように干潟全体が海 面下となるものの、旧堤防の輪郭だけは海面に姿を 見せる。

訪れたときは干潮時だったこともあり、干潟の南端部に降りて旧堤防の方向に足を向ける。そこは、僅かに顔を出すだけとなった石垣の跡や、だいぶ朽ちてはいるが松丸太と思われる沢山の木杭が立ち並

場をは

じめと

び、それぞれが並行にほぼ直線状に連なっている。 明らかに人工的な造りであることがわかる。そして、 この旧堤防石垣が人造石工法によるものと確信した のは、石と石の隙間にたたきを確認できたことと、 周辺にたたきの小塊をいくつも見つけたことからで あった。

2. 丸一新田の歴史

(1) 文献に見る記録

この新田がいつ誰によって造られたのであろうか。 じつはこれが難題であった。この新田の情報を知っ た後、ここが新田だった時代のことを知る地元まるいち 老に聞き取りを行った(詳細は後述)。その際に丸一 新田と呼ばれていたことを聞くこととなった。しか しこれを記録する資料が出てこない。管見の限りで はあるが、田原地域に関する町史や郡史、各種の郷 土資料を繰っても、ネット検索しても丸一新田の名 前すらヒットしなかった。一時は本当にその名称だったのかと疑問も抱くようになっていた。

そうした中、訪ねた地元田原市中央図書館の司書から教示されたのが前頁の図 1 であった。ひとすじの光が差し込んできた思いであった。さらに同じく地図への記載だけであったが、豊橋市のホームページにもその名を見つけることとなった(「汐川干潟保全基本指針」https://www.city.toyohashi.lg.jp/4220.htm、2020.3.18 検索)。

しかし、丸一新田の詳細を記した資料は未だ見つけられていない。明治期に開発され、1950年代頃まで使われていたことは、後述する複数の地元古老からの聞き取りや若干の関係資料等によって推測できるが、前述した地図に記されるだけで、なぜかこれに関する歴史記述がないのである。

司書からも沢山の資料を紹介いただき 2 日間ほど目を通したが、詳細な年表を掲載する『田原町史』(上巻、中巻、下巻、1971 ~ 77 年刊)や『渥美郡史』(1972 年刊)にも記載がなく、新田に隣接する田原市浦町の『浦区郷土史』(1957 年刊)や、同吉胡町の『田原町吉胡郷土史』(1962 年刊)にも、この新田のことが記されていない。うまく機能しなかった新田だったからなのであろうか。それにしても不思議である。

(2)1940年代~50年代の丸一新田の一断面 ー地元古老への聞き取りよりー

謎だらけの丸一新田であるが、ここでは丸一新田が新田として機能していた時代を知る二人の地元古老の方の話から見ていきたい。この古老の紹介も田

原市教委の方からであった。

主に聞き取りできたのは、1932 (昭和 7) 年生まれの浦町在住の方であった。古老が小学校 4 年生頃 (1942 年頃) に、この新田の管理人をしていた家に同級生がいて、よく遊びに行った。新田の堤防を通って水路などで魚取りなどをしたとのことである。聞き取りは 2020 年 7 月であった。その後 2022 年 3 月にも追加の聞き取りを行った。また同月に、1933 (昭和 8) 年生まれの別の波瀬町の古老にも話を伺うことができた。当時養魚場の管理人だった家に同級生がいたという方である。

以下にその詳細を記す。多くは古老が 10 歳前後の頃に見聞きした内容であるが、浦町の古老が 20 歳前後の頃 (1950 年代初め頃) に見た新田内の様子も交えている (次頁図 3 の地図にも示す)。

<新田名、開発年>

- ・新田名は丸一新田と呼んでいた
- ・新田がいつ、誰によって開発されたか知らない

<新田内の様子、管理人>

- ・昭和 17 (1942) 年頃に、新田の管理人をしていた 同級生の「高瀬達郎」宅によく遊びに行った
- ・高瀬宅は新田の西側堤防すぐ脇の坂道を下ったと ころにあった、立派な庭を持つ豪邸だった
- ・新田には、水田と養魚場があり、大体半々くらい だった
- ・新田内には、幅の広い水路が南北方向に 2 筋(幅 $4 \sim 5$ mほど)、東西方向に 2 筋(幅 10 mほど)あり、それぞれの水路脇に道路があった
- ・南北の水路には 2 本、東西の水路には 1 本の橋が あった、どれもコンクリート製だった、今も残骸が 残っているはず
- ・東西方向の 2 本の水路のうち、北側の水路の先に 杁 (樋門) があった、「ゆり」(杁) とも「いりば」(杁 場) とも呼んでいた
- ・杁場には管理人がいた、「きまた」という人だった
- ・南北の水路の西側(陸側)に水田があり、東側(海側)は養魚場だった
- ・水田の水は新田の南端辺りに井戸を掘ってまかなった、しかし水不足だった、今も石造りの井戸の跡が残っているはず
- ・井戸には管理人「鈴木たんじ」がいて、電動ポンプで汲み上げていた
- ・養魚場にも番人(管理人)がいた、横浜から来た 同級生の「森でんのすけ」の母親がやっていた、母 親の名は「おくまさん」と言い、怖い人だった



図3 1940年代~50年代の旧丸一新田の様子と現存人造石遺産 当時を知る地元古老の証言及び現地調査より (国土地理院地図2008年版空撮地図に加筆)

- ・養魚場では鰻を養殖していた
- ・昭和 28 (1953) 年の 13 号台風のあと (20 歳頃)、 堤防が 2 ヵ所切れて、もう権利がなくなったと思って鰻を獲りに行ったとき、「おくまさん」から大声で 怒られた
- ・養魚場や水路には沢山の藻は生えていた、多いと きには人が動けないほどあった
- ・この藻を養魚場の人がよく取っていた
- ・水田には米のほか半分ほどに蒲が植えてあった
- ・蒲はゴザを作るためで、穂が出る直前くらいの軟 らかいところを利用していた、管理人の高瀬宅の周 りに沢山植えてあった
- ・高瀬宅のすぐ南側にゴザを織る工場があった
- ・田の仕事やゴザ作りでは地元の浦地区や対岸の牟 呂地区からも日雇い(「ひよとり」といっていた)の 人が何人も来ていた
- ・ゴザを織る工場には4,5人が働いていた
- ・作っていたゴザは2畳ほどの大きさだった

<堤防の様子>

- ・新田周りの堤防は大きかった、高さは海側の方は 石垣造りで $2\sim 2.5~\mathrm{m}$ ほどあった
- ・干潮時は潮が引き堤防下は砂利で埋まっていた、ここでアサリが採れた
- ・石垣堤防から浜に降り、何度もよじ登ったことがある
- ・最も潮が上がった時は、堤防の天端下 $50 \sim 60$ cm のところまで来て、波が乗り越えそうだった

- ・堤防内側は土を固めただけだった
- ・堤防上は幅 2 mほどで、ススキなどの草がいっぱい生えていた、それを掻き分けて行った、堤防の中央付近は獣道みたいになっていた
- ・水田内の道路もススキなどで生い茂っていた、ここを通って樋門近くの幅の広い水路で 魚をとった
- ・人造石と言う言葉は知らないが、服部長七 とか服部組の名前は聞いたことがある
- ・石灰と赤土を使ったたたきは地元でも昔からよく使っていた

<堤防の決壊、新田の終焉>

- ・堤防決壊は、昭和 28 (1953) 年の 13 号台 風の時だったように思う
- ・切れた 2 ヵ所は、杁の近くの南側と、井戸のあった新田の南端近くだった
- ・しかし復旧工事はされなかった、水田が少なく、修理しても採算が取れないと判断した と思う、以後ずっと放置されてきた、今もそ

の時に切れた跡が残っている

- ・北側の2ヵ所の決壊箇所は、後に切れたところ
- ・新田が放置された後、崩れた堤防石垣に使っていた はまず かとうがん た幡豆石 (花崗岩) を拾いに行った人がいる、この 辺りではとれない貴重な石として再利用した

以上の聞き取りをもとに、地図上に記したのが図 3 である。新田内の様子を良く残す国土地理院地図 2008 年時点の航空写真を利用して加筆した。

3. 旧丸一新田の現状と人造石遺産

(1) 旧丸一新田の輪郭

図 3 で示した丸一新田の堤防の輪郭は、今も大きくは変わっていない。周囲の堤防自体は形を留めないほど崩れているが、崩れた土砂が盛り土のようになっている。そのため、図 2 や写真 1 のように、満潮時もその姿を見ることができ、当時の新田の形状や大きさを概観できる。一方、新田内の水路や道路は 2008 年の空撮写真のような鮮明さはない。僅かにそれらしいものが確認できる程度である。



写真1 満潮時の旧丸一新田堤防跡(2022.3.21筆者撮影)



写真2 干潮時の旧丸一新田堤防跡(写真1と同じ箇所、中央 付近が樋門跡、右端が決壊箇所)(2022.3.21筆者撮影)

この田原湾のある三河の潮位予測(気象庁の潮位表 https://www.data.jma.go.jp/、2022 年 3 月 21 日 閲覧)によれば、満潮時 224cm、干潮時約 29cm と、干満差がおよそ 2 mである。と言うことは、満潮時に姿を見せる堤防輪郭は、大きく崩れてはいるものの、当時 2 m余りと言われた高さの半分近くは残しているものと思われる。

その堤防輪郭から見る丸一新田の大きさは、国土地理院地図の地図上で測った概算から、東西の最大幅が約 550m、南北の最大幅が約 730m である。面積は、500×500 mとして計算すると約 25 万㎡、東京ドーム 5 個分ほどと、かなりの面積である。

堤防決壊箇所も確認できる。現状、北側の 2 ヵ所を含め 4 ヵ所ほどに見られるが、当初切れたところは、前述の古老の聞き取り証言(以下、証言と略)のように、北側でなく西側と南側である。

また図 3 に示す新田内の水路や道路は、現状は痕跡程度である。僅かに真っ直ぐに伸びた道路か水路の構造物と思われる痕跡が目にできる(写真 3)。

水路に架かっていたコンクリート橋の残骸も 3 ヵ 所にある。遠くから眺めた範囲であるが、砂に埋も れた主桁や欄干が見られる (写真 3)。



写真3 旧丸一新田干潮時の水路と橋跡(2022.3.24筆者撮影)

最も奥(東端の海辺)にある樋門跡も、望遠で見る範囲であるが痕跡を目にできる。2本の石柱が少しの間隔を開けて立ち、海側には石垣の崩れと思われる石の塊もある(写真 4)。立派な石垣だったと証言された樋門の名残であろう。樋門周りの内側にも石垣護岸を僅かに残している。



写真4 旧丸一新田干潮時の樋門跡 (2020.6.24筆者撮影)

水田用の水を供給した井戸も、証言通りの位置に 痕跡がある。4ヵ所に円形をした井戸側のような構 造物が少し間隔を開けて並んでいる。あったはずの ポンプ設備はさすがに見当たらない。

以上述べたいずれのところも、干潟の澪筋があったり泥濘んでいて近づけず、望遠による確認に留まったが、少なくとも 50 年以上海辺に放置されてきた割には良く痕跡を留めているといえよう。

(2) 旧丸一新田の人造石遺産

こうした中、干潟内に唯一近寄ることができたのが旧新田南端の堤防跡であった。本文冒頭で述べたところである。ここは旧丸一新田堤防の陸側根元部分に当たる。

その堤防跡は、かつて堤防があったと思われるところが僅かに盛り上がっている。そこには一直線に伸びた石垣らしきものと、その脇に並ぶ基礎木杭の残骸が、ともに平行して東(海側)に向かって延びている(写真 5)。その様子からは、これがかつての

石垣の名とくかるこかにはいいののではないのではないのではないのではないのでは、ないでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは

また冒頭で 述べたように、この石垣にたたきがたことないたことから、人造



写真5 旧丸一新田干潮時の南端堤防石垣 と基礎木杭の痕跡(2022.3.21筆者撮影)

石工法による堤防跡と判定したが、これも新田との 事前情報がなければ見過ごしていたであろう。

直線状に延びた残存石垣は、おそらく天端部分を削り取られた状態と思われる。軟弱地盤に用いられる基礎木杭もほぼ同じ高さで残っていることから、そう判断できる。また僅かに海側に向かって傾斜しており、堤防石垣法面の一部であることを示してもいよう。

なお、この辺りの干潟については、別の地元古老の話によれば、50年ほど前と比べ、1m以上砂が堆積して浅くなっているという。1959(昭和34)年の伊勢湾台風後の復旧工事で沿岸に巨大なコンクリート堤防ができたが、当時その堤防下の浜辺は、今より子どもの背丈ほどは低かったとのことである。こうした状況を考えると、僅かに姿を見せる堤防石垣も、1m余り埋まった状態にあるのかも知れない。

石垣の石は、人造石工法では広く用いられる花崗岩が使われている。また間知石状になった石の形からも、石垣用に加工して用いたことがわかる。証言にもあるように花崗岩はこの地域ではとれない石である。おそらく三河湾の対岸となる幡豆石の産地幡豆町(現・西尾市)から運んだものであろう。

こうした残存物に、人造石工法特有の材料である たたきや幡豆石が確認できたことから、堤防全体が この工法で構築との推測も高まる。

(2)御山川船溜まりの人造石護岸

旧丸一新田における今一つの人造石護岸が、旧新田北西端の御山川の船溜まりと接する堤防の一角に存在していた。

この堤防は、現在は突堤となっていて、御山川と 丸一新田とを分ける形に造られている。しかし当初 は丸一新田を囲む堤防の一つであった。その意味で は唯一今も機能する丸一新田の堤防といえる。場所 は、図 3 の北西角に赤線で示したところで、船溜ま りに面した護岸である(写真 6)。



写真6 旧丸一新田北西角の現存堤防(奥が旧丸一新田、手前が御山川、右端の草むら付近の護岸に人造石現存) (2022.3.21筆者撮影)

造発で御岸た護がてこて護もの川らこのに場気の眺ろ造なに外の然。対め、りっ降



写真7 御山川船溜まりの人造石護岸 (2020.7.24筆者撮影)

り立った。草を掻き分けて向かった先の護岸を目に したとき、思わず人造石だと叫んでしまった。石と 石の隙間にしっかりとたたきが詰まっていたのであ る(写真 7)。その長さはおよそ 20 mほど、だいぶ 痛みは多いが、新たな人造石護岸の発見であった。

4. 丸一新田の開発と終焉の時期

(1) 古地図に見る丸一新田の推移から

ここでは不明となっている丸一新田の開発と終焉の時期について、古地図を頼りに考察してみたい。

次頁に示す図 4 は、丸一新田が存在した田原湾干 拓状況の変遷を、年代を追って作成したものである。

1889 (明治 22) \sim 1890 (明治 23) 年の地図には 丸一新田は見られない。田原湾は北側に大きな州が 連なっていることがわかる。丸一新田付近も小さな 幾つかの州が存在している。

1916 (大正 5) ~ 1918 (大正 7) 年になると、丸 一新田が現れている。ほかにも田原湾沿岸各地区に も新田干拓が進んでいる様子が見られる。

1938 (昭和 13) ~ 1950 (昭和 25) 年の地図には、 丸一新田に田の地図記号が記され、新田として機能 している様子を見て取れる。証言にあった半分ほど が田で、残り半分は養魚場だったと言われたことも 地図上からうかがえる。北側の八角形をした埋立地 は 1943 (昭和 18) 年 4 月に豊橋海軍航空基地とし て造成されたところである (現・明海工業団地)。

1956 (昭和 31) ~ 1959 (昭和 34) 年になると、 丸一新田は跡形もなく消えている。

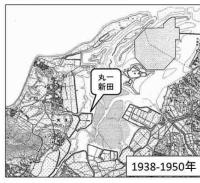
またこれとは別の、大日本帝国陸地調査部の 1899 (明治 32) 年発行の地図には、この時はまだ丸一新 田は記されていない。

以上より、丸一新田の開発期を考察すると、1890年代末頃までは地図に記載がないことから、大凡ではあるが、1900年代に入った頃から 1916年までの間に開発されたと推測できる。

また終焉期は、 $1950 \sim 1956$ 年の間であることがはっきりする。1953(昭和 28)年の13号台風で堤







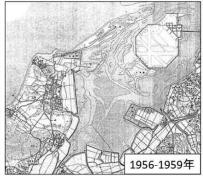


図4 1889~1959年における田原湾の変遷 (「今昔マップ on the web」より作成、加筆)

防決壊以後、再建されることなく終わったとの証言 にも符合するところである。

(2) 服部長七施工の工事契約記録から

前述のように旧堤防に人造石を確認できたことから、人造石工法の開発者であり施工業者でもあった服部長七(服部組)が施工した可能性も考えられる。

表 1 は、服部組名古屋支店が 1901 (明治 34) ~ 1904 (明治 36) 年の 3 年間に契約した 254 件の「工事一覧」(岩津天満宮所蔵) から、丸一新田が所在していた渥美郡童浦村に関わる工事を抜粋したものである。これより見ると、童浦村では明治期 30 年代の 3 年間に 5 ヵ所の工事を契約していることがわかる。

表1 田原市童浦地区の服部長七の人造石施エリスト

工 種	場 所	契約月日	請負額(円)
人造石樋管工事	渥美郡童浦村	M34.3.20	2,024.907
人造石護岸工事	渥美郡童浦村大字吉胡	M34.10.5	1,955.310
人造石土管樋工事	渥美郡童浦村大字浦	M35.6.25	602.815
人造石樋管工事	渥美郡童浦村大字吉胡	M35.6.25	1,098.091
人造石護岸工事	渥美郡童浦村大字吉胡	M36.2.25	259.929

出典:服部組名古屋支店工事係、明治34-36年「工事一覧表」(岩津天満宮所蔵)

服部長七の服部組は、明治 30 年代(1900 年前後の頃)には、名古屋港の 1 号地から 5 号地の埋立工事をはじめ、愛知県内各地の護岸や樋管工事を人造石工法で施工したことが知られている。丸一新田近くでは、近隣の牟呂沖の神野新田干拓堤防(全長約12.2km)を 1895(明治 28)年に人造石工法で完成

させている。

表1にある5ヵ所の工事のうち、護岸工事は吉胡の2ヵ所となる。当時の丸一新田の地区が吉胡なのか浦になるのか、これも良くわかっていない。現在の町境でいくと、丸一新田に隣接する愛三(かっての愛三新田)は浦町に入る。しかし1957(昭和32)年7月に浦区郷土史研究会が発行した『浦区郷土史』に掲載される地図(出典不記載)には、丸一新田、愛三新田ともに吉胡の区域となっている。

当時は吉胡であったとすれば、表 1 にある明治 34 年及び 35 年の吉胡の人造石護岸工事は、丸一新田を示すかも知れない。ただし吉胡には江戸時代に開発された吉胡新田、浦にも江戸時代開発の浦新田があり、にわかに断定はできない。樋管についても新田に不可欠であるが、これも同様に丸一新田とは断定できない。しかし、述べたような旧場防跡での人造

石の確認と、樋門は立派な石垣であったとの証言を 考え合わせると、表 1 の工事のいずれかが丸一新田 を指している可能性があるとも思われる。

5. 田原市童浦地区の人造石遺産

新田開発など大規模な人造石工事が行われた地域には、堤防や樋門だけでなく、その周辺地域に人造石の石垣擁壁、家の腰壁などに使われているのがよく見られる。

今回の旧丸一新田の調査のきっかけも、冒頭で述べたように、浦町に隣接する波瀬町にある願照寺の擁壁が人造石でできているのを確認したことが発端であった(写真 8)。たたきの種土として使ったというまみ砂の採掘場所に案内されたのも、一般によく使われる真砂土がこの地区にないことから、どのような土を使ったのかを確認するための調査であった。



写真8 願照寺の人造石擁壁(南西側)(2020.6.24筆者撮影)



写真9 願照寺南東側の人造石擁壁、目地にたた きを確認(2020.7.24筆者撮影)

照垣事で人法石間く隙のの、造る石有石がそに願石見り。工のの広のた

たきが詰まっているのが確認でき (写真 9)、明らか にこの工法で造られたことがわかる。

ここは願照寺を含めた波瀬町自体が山の斜面に建 てられた集落で、町内の民家にも似たような人造石 の石垣が散見される。

願照寺の道路沿いの石垣は、高いところで 2 mほどの高さを持ち、境内周りを人造石の擁壁で囲んでいる。その長さは周囲 80 mほどになる。そこに使われる石は、案内頂いた田原市教委の方によれば、多くは地元笠山の石、チャートが使われているが、正面階段周りは幡豆石が使われており、見た目を意識して配置したのではという。

真宗大谷派寺院である願照寺の歴史は、同寺資料によれば、慶応 2 (1866) 年に始まるとされる。この頃に波瀬の浜に鯨が打ち上げられことが本堂建立のきっかけになったとのエピソードがあり、1880(明治13)年2月に本堂を建立している(絵本にもなり、その際の鯨の骨も本堂に展示)。

しかし擁壁石垣の構築年については記載がなく、 住職も記録がなくわからないという。ただ、同寺資料の中に、今は改築されているが玄関座敷が明治中 頃建立とあることから、境内整備をする中でこの頃 に擁壁が整備されたとも考えられる。

ちょうど明治の中頃となる 1890 年代は、神野新田干拓堤防や童浦村での護岸や樋門工事に人造石が採用されていたときであり、これとの関わりがありそうである。

なお、人造石では目地の痛みが出たときは、目塗り作業を必須としている。願照寺の人造石擁壁も、つい最近地元波瀬の人が目塗り修理をしてくれたとのことである。訪れたときはその真新しい姿を目にすることができた。

6. おわりに

旧丸一新田の調査を開始して 4 年近く経ってしまった。前述したようにその歴史情報が得られなかっ

たのが要因であった。未だ詳細は得られていないが、 各種資料や証言などから、開発年と終焉年を推測す ることができた。

その開発年については、童浦村で人造石工事のあった 1901 ~ 1904 年を軸に 1916 年までの間とほぼ特定でき、終焉の年を 1953 (昭和 28) 年の 13 号台風がそのきっかけとなったことを突き止めることができた。もちろん、今後新たな情報が出てくれば、それに従うことになるが、現状ではこのように考察した

また、本稿では触れなかったが、1970(昭和 45) 年~71年にかけて提起された田原湾の海面下の土地をめぐって争われた訴訟(1986年 12月に最高裁判決で結審)の、該当地区の一つが旧丸一新田であることを調査の過程で知った。しかし精査はまだ半ばであり、今回は割愛することにした。

旧丸一新田は、現在、再び満潮時は海面下となったが、干潮時には大きくその姿を現している。新田の終焉後、長年の間に海砂によって埋まり、今では全国的にも著名な、渡り鳥が飛来する汐川干潟となっている。

しかし、それに注目するだけでなく、かつてここに人の営みがあったこと、歴とした新田があったこと、それも記憶に留めて欲しい。かつての堤防跡をはじめ、水路跡やコンクリート橋などの構造物も僅かであるが目にできる。さらに歴史的工法である人造石遺産にも目を向けて欲しい。

旧丸一新田については、未だその歴史の詳細が掴めていないが、引き続きそれを明らかにしていきたいと思う。情報をお持ちの方は是非連絡をと願う。

最後になったが、調査では田原市波瀬町及び浦町の3名の方から貴重なお話を伺うことができた。御礼を申し上げる。田原市役所の増山禎之氏、田原市博物館の木村洋介氏には情報提供や現地調査で協力いただいた。田原市中央図書館、愛知大学中部地方産業研究所にも資料検索等でお世話になった。心より感謝申し上げる。

【主な参考文献】

- (1) 『田原町史』下巻、田原市、1977年5月。
- (2)郷土史研究会同志会編『浦区郷土史』浦区事務所、1957年。
- (3)『田原町吉胡郷土史』田原町吉胡区郷土史編纂委員会、1962年9月。
- (4)松岡敬二編著『古地図で楽しむ三河』風媒社、2016年。

【短信】

台北・二二八公園のラジオ塔

藤井 建/FUJII, Ken

2020年5月に罹患して以来、研究会活動にはご無沙汰している。今回の投稿は、会報第82号の市野清志会員による「第167回定例研究会の概要」に紹介された渡辺治男会員の「ラジオ塔について(現状報告)」がきっかけである。

本稿では、台北のラジオ塔について紹介する。私は2009年と2014年の二度、台北を訪れた。2009年に、二二八和平公園内の「台北二二八紀念館」を見学した。

この紀念館は、戦後1947年2月28日に起きた「二二八事件」(詳細は省くが、大陸から来た外省人と台湾の住民(本省人)との摩擦が引き金となった悲惨な事件である)の詳細を紹介する館である。

この事件で占拠されたのが、旧台北放送局(戦後は台湾広幡電台と改称)で、その建物が紀念館となっている。



[写真1] 台北二二八紀念館(旧台北放送局) (2009年 筆者撮影)

前置きが長くなったが、ここにラジオ塔があることは、2014年の訪問時に初めて気がついた。

高さ2mほどのいわゆる灯籠型のもので、そのと きはラジオ塔とは知らずに写真を撮っている。

帰国してから改めて二二八事件や紀念館のことを 調べるなかで、ラジオ塔が放送塔や放送亭として紹 介されているのを知った。

台北のラジオ塔について、『台湾日日新報』1934年 8月15日号に次のように書かれている。

「台湾放送協会では創立三周年を記念すべく約二千 圓を投じてこの程見事なグラニット(花崗岩・御影



[写真2] ニニハ平和公園のラジオ塔(2014年 筆者撮影)

石)製のラヂオ塔を台北新公園広場(現・二二八和平公園)の西側に新設した。この塔の中には二箇の拡声器が備はってをり、一は北医側に、一つは音楽堂に向って大衆にサービスしようと云ふのである、前日来実施中のラヂオ体操もこの塔から流れ出るメロディーに依って行はれてをり連日の甲子園野球の中継放送には炎暑にひるまぬファンが塔を取囲んで刻々と変るボールの動きに酔うてゐる。」(括弧内は筆者による)

なお、このラジオ塔には当初、木製の立派な屋根が付ていたが、現存する塔の屋根はコンクリート製に作り直されている。また、正面には、台北放送局のコールサインであるJFAKの青銅製のプレートがはめ込まれていたが、これは外され、「台湾広幡電台」の文字が刻まれている。

現在、ラジオ塔は「台湾広幡電台放送亭」として、台北市の「市定古蹟(文化財)」に指定されている。

コロナ禍が収束し、もし訪台される機会があれば、 ぜひ産業遺産として、台北二二八紀念館ともども訪 れていただきたい。

※本稿作成にあたり、次の論稿を参考にした。

井川充雄「台湾におけるラジオ塔―日本統治下の 台湾におけるラジオの共同聴取―」(応用社会学研究、 2021、No. 63)

【産業遺産情報】

消滅の危機迫る赤煉瓦水路

天野武弘/ AMANO, Takehiro

愛知県大府市横根町平子の明 神川 (境川支流) 上流部に、消え去ろうとしている赤煉瓦水路がある。 U字形に斜面となった両側面と底を赤煉瓦で敷き詰めた珍しい水路である。建設年は不詳だが、明治時代と推測されている。その大きさは、ここを清掃して調査した「横根平子のまちづくりを考える会」によれば、幅 2.7 m、斜面の高さ約 4 m、斜面の長さ7.7 m、平面部の長さ1.9 mである。傾斜角は25 度と急斜面である。赤煉瓦は約2,500 個と推測される。

明神川については、その下流部すなわち境川と合流するところに、人造石工法による明神樋門 (2021年2月国の登録有形文化財に登録)が存在する。近年大府市では注目され始めた河川となっているが、赤煉瓦水路は、偶々この上流部の土地開発があり周辺が整地されることで発見に至った経緯がある。

この赤煉瓦水路は、もう一つの歴史的産業遺産の発見として、地元では沸き立ち、その価値を探るべく 2021 年初頭頃より調査が始められた。その結果、現段階で分かったこととして、使用される赤煉瓦に井桁印の中に「五」とか「廿」、あるいは漢数字だけ



写真1 明神川上流部の赤煉瓦水路(2022.2.6筆者撮影)

の「廿五」等の刻印があり、明治から昭和にかけて 隣町の刈谷で操業していた「大野煉瓦」製の可能性 が出てきたこと。煉瓦の大きさも、長さ×幅×厚さ が平均で 230×111×57mm と大振りで、明治時代の 煉瓦の特徴を示していること。目地材も明治時代の 特徴である石灰モルタルが使われていること。これ らのことから明治中期以降建設の可能性が高いと判 断されている。

また煉瓦の積み方が一風変わっている。すべてが 小口を表面にした長手積みである。煉瓦積み水路に した目的も定かでないが、すぐ上流側の溜池(宝池) からの水をスムーズに流すため、あるいは水落場が 滝壺となることや川底の土砂流出を防ぐためだった かも知れない。

しかしここは 2022 年初夏頃までには解体撤去の予定と言われている。4月17日には最後の現地調査が行われる予定である。今しか見ることができない赤煉瓦水路でもあり、関心ある方は筆者までご連絡を。地元ではこれまでの調査記録の作成と煉瓦回収が検討されている。

第170回定例研究会の概要

八田健一郎/HATTA, Kenichiro

日時:2022年01月16日(日)13:00~17:00 会場:名古屋市市民活動推進センター 集会室

参加:13名

司会・進行:山田 記録:八田

1. 研究報告、調査報告

[170-11-01]「三共工作機械資料館オープンの意義 - その経緯と展示の特徴-」/天野武弘

三共工作機械資料館は、JR東海道線菊川駅から直線距離2km程に所在する。(株)三共製作所は、カム製作の主要メーカの一つ。2021年11月24日の資料館開館お披露目会は、地元を中心に170名ほど参加者があり、蜜を避けるためグループに分けて館内を案内された。

資料館での展示は、歴史的な工作機械86台である。他に第1、第2工場での展示やバックヤードに保存のものを合わせると140台に上る工作機械を保存している。コレクションの9割以上は外国製。大量生産と共に発展した工作機械の意義、工作機械の発達史、手道具から機械化、工作機械へと進んだ歴史、歴史的工作機械などをゾーンに分けて展示、照明も工夫



[写真] 三共工作機械資料館 (2021/11/24 天野武弘撮影)

されて展示している。2017年から国立科学博物館の 鈴木一義氏に展示計画依頼され、日本工業大学の丹 治明氏と天野武弘氏との3名で監修された。

三共製作所は、1981年から静岡工場として現地に 新設され、現在は丘陵地に橋を架けながら緑化など 景観に配慮して第3工場まで増設されている。

工作機械資料館オープンの意義:

- ・日本では数少ない本格的な工作機械資料館。
- ・外国製工作機械中心(97%)に展示し極めて珍しい。
- ・20世紀初頭までに製造された切削機械のほぼ全機種に亘る展示。
- ・欧米の産業革命以前の希少な工作機械展示。
- ・企業博物館であるが、全て他社製機械を展示。
- ・学校教育、社会教育、社内教育などへの活用を意図した教育的博物館。

工作機械資料館オープンの課題と今後:

- ・「オープンがスタート」との認識を支える社内組織 の整備。
- 恒常的な機械整備の体制確立。
- ・展示解説などの検証と見直し。
- バックヤードの確立。
- 一般公開への整備。

*謝辞:(株)三共製作所への感謝と、オープン間近に急逝された丹治明氏の功績を賞賛。

【質疑】

石田:パンフに英名追記必要ではないか。

回答: "Sankyo Machine Tools Museum" など次回パンフに記載することなど依頼する。

浅野:「百万塔」展示の意味は何か。

回答: 手仕事の位置付けでの大量生産の始まりを示す。

杉山:自動車関連で白楊社のものはないか。

回答:ありません。

寺沢:資料館の建設費や維持費はいくらか。

回答:建設費、維持費は不明。運営、整備体制がは

かられつつある。音声ガイドを検討中。

[170-11-02]「トヨタ挙母工場・日清レイヨン美合工場への電力供給をめぐって」/浅野伸一

副題:矢作水力と岡崎電灯・旧中部電力との係争問 題を中心に

2020年3月に発表された内川隆文氏の「1930年代逓信省電力行政の変遷 - 中部電力・矢作水力間の紛争をめぐる革新官僚・大和田悌二の言説を中心に一」で触れられなかった産業史的な意義を中心に検討し、ここに発表された。

岡崎電灯(→旧中部電力→東邦電力→現中部電力 cf. Wikipedia:中部電力[1930-1937]、中部電力を参 照)

明治以来の電気事業法にて重複供給が認められていたが第一次世界大戦後の不況時に電力会社の競争 苛烈化に対応し、昭和4年に電気事業法が改正公布され、重複供給が制限された。昭和8年には電気委員会で「特定供給許可基準」が定められた。本省では電力業界の秩序を重視する考えだったが、名古屋逓信局長だった大和田悌二は、これを利用して国策上重要な産業を保護育成しようとした。

【質疑】

天野・八田:電力会社・矢作水力の地域関係が分かり難い。

回答:新参の矢作水力は矢作川上流部であった。

黒田:資料冒頭部の内川氏の発表は、2010年ではなく2020年ではないか。

回答:2020年に修正。

杉山:矢作水力は、岐阜県岩村にも配電したか。

回答:岩村電気鉄道を矢作水力が買収し、配電していた。

寺沢:岩村電気鉄道で恵那から資材運び電力施設を 設置し配電した。

資料訂正 P.5、上から8行目

- (誤)「(服部)兼三郎は自分が三つ年上の
- (正)「(服部)兼三郎は自分より三つ年上の

[170-11-03]「産業遺産の保存・活用の新たな枠組み -ローウェル国立歴史公園とキャッスルフィールド都市遺産公園を事例として-」/石田正治

昨年オンラインで実施された産業遺産学会2021年 度全国大会研究発表会での報告をもとに話された。

産業遺産を公園として管理運営するという、産業 遺産の保存・活用の新たな枠組みとしての先行事例 として、アメリカのローウェル国立歴史公園とイギ リス・マンチェスターのキャッスルフィールド都市 遺産公園が紹介された。

ローウェル国立歴史公園のあるマサチューセッツ

州ローウェルは、ボストンの北、約50kmの所にあり、産業革命時代にメリマック川沿いに計画的につくられた工業都市である。1820年代には、繊維工場が建ち並び、繊維産業の中心地となった。第二次世界大戦後は、ニューイングランドの繊維産業は衰退し、ローウェルの繊維工場の建物の多くは放棄された。



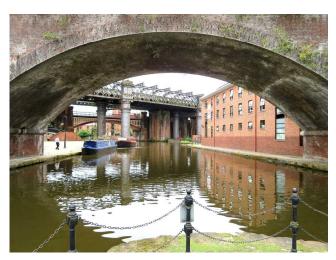
[写真1] ローウェル国立歴史公園のブート綿糸紡績工場と路面 電車 (出典: Wikimedia, public domain)

1978年に、ローウェルの繊維工場などの歴史的建造物群は、アメリカの産業革命の歴史的側面を象徴するものであり、文化的、歴史的な場所として保存するためにローウェル設立法が公布された。この設立法により設立されたのがローウェル国立歴史公園である。一般に公園は、自然のもの、山、湖、樹木、池などに人工物として散策路や噴水などで構成されるが、ローウェル国立歴史公園では、繊維工場や運河、鉄道、路面電車などで構成される。

ローウェル国立歴史公園は、連邦政府によって保護される国立公園として設立されることによって、 産業革命の歴史と意義、文化的側面が保存され、現 在および将来の世代への継承を可能にしている。

イギリス、マンチェスターでは、都市遺産公園という枠組みで、キャッスルフィールド地区にある産業革命時代の運河、鉄道、倉庫、市場などの建物や土木施設を都市遺産として捉え、その地区を公園として保護、管理している。

マンチェスターは18~19世紀の産業革命時代、コットンポリスと呼ばれるほどに綿工業が発展し、産業革命を牽引する大工業都市となったが、その綿工業の原綿は、リヴァプール港で水揚げされ、当初はマージ川・アーウェル川水路や1761年に開通した最初の工業用運河、ブリッジウォーター運河による舟運で、キャッスルフィールドのブリッジウォーター運河ベイスン(船溜まり)まで運ばれ、そこから馬車



[写真2] ブリッジウォーター運河と鉄道高架橋 (2015/08/30石田正治撮影)

により各紡績工場に運ばれた。

1830年には世界最初の旅客鉄道、リヴァプール・マンチェスター鉄道が開通し、キャッスルフィールドにリヴァプール・ロード駅がマンチェスター側の終着駅として造られた。運河ベイスンや鉄道駅の脇には煉瓦造倉庫が建ち並び、キャッスルフィールドは、工業資材・製品の物流の拠点となったのである。

1982年、マンチャスター市は、キャッスルフィールドを世界初の都市遺産公園 Urban Heritage Park として、地域全体を歴史的遺産として保護区とした。この考え方はヒストリック・イングランドにはない遺産保護の仕組みである。キャッスルフィールド都市遺産公園の保護・管理は、マンチェスター・シティー・カウンシルが行っている。

キャッスルフィールド都市遺産公園で、保護の対象となっている産業遺産は、ブリッジウォーター運河ベイスン、周辺の倉庫群、運河に架かる高架橋、リヴァプール・ロード駅、グレート・ウエスタン鉄道のローワー・バイロム通り倉庫、1830年倉庫、旧ローワー・キャンプフィールド市場などがある。この内、リヴァプール・ロード駅とローワー・バイロム通り倉庫、1830年倉庫、旧ローワー・キャンプフィールド市場は、マンチェスター科学産業博物館の施設となっている。

【質疑】

大橋:英国での保護が出来る過程は。

回答:1950年代からマンチェスターの繊維産業の衰退し、その街の再生活動からアイデアを出して来た。

「都市遺産公園」というコンセプトが新しい産業遺産の保存と活用の枠組みで、市民生活の場と観光資源として活用することで、街を再生している。

大橋:また、財源は。

回答:ローウェル国立歴史公園は、国立であるので

連邦予算だが、近年削減もあるので課題となっている。イギリスのヒストリック・イングランドの歴史的建造物などの保存・修復の費用は、国家予算であるが、国の支援が低下し、財政難となっている。

大橋:欧州は石の建物、日本は木の建物と差があり、 文化財保護に差がある。法律などどういう工夫が考 えられるか。

回答:いずれにしても町や国の財政的支援が必要。

大橋:リヴァプールは、再開発して世界遺産登録を 抹消された。経済重視の潮流もあり、課題。

回答:観光資源化する例もある。

寺沢:ローウェルは工場建物らしからぬ立派さ、織機類はあるか。

回答:博物館にはある程度残されている。

浅野:半田や常滑は観光資源化として似通っている。

回答:半田は産業の紹介と景観で好例である。他に 大阪の中之島も候補になると思われる。

2. その他諸報告、保存問題

[170-22-01] トピックス (産業遺産に関する話題・ 近況など)

- ・「タイプライター博物館」(天野)
- ・国鉄バス第1号車「鉄道省乗合自動車」(天野)
- ・Y S-11 量産初号機(1964年初飛行)(天野) 感想:タイプライター博物館、国鉄バス第1号車 などまた見学会の候補となる。
- ・名古屋市博物館リニューアル(官民連携で)(山田) 本館(特別展示室)と隣接地の新説施設は2016年、 常設展などを含めたフルオープンは2027年。基本計 画策定は丹青社・日本総合研究所JVに委託(納期は2 022年3月31日)。
- ・本日のテレビ番組紹介「サイエンスZERO 日本発! 執念が生んだ驚異の顕微鏡を大特集」(山田)

本日:23時30分~24時00分 NHK Eテレで放送 高速原子間力顕微鏡で歩くたんぱく質やゲノム編 集の瞬間を映す。

ゲスト:柴田幹夫(金沢大学教授)

司会:小島瑠璃子、浅井理

- ・名古屋港で艀の船上生活者の証言や資料を集めて います、できれば聞き取りを希望(山田)
- ・大橋:書籍「愛知の昭和30年代を歩く」の取材で 行ったが、対象者が高齢で施設に入っておられ、資 料は処分されていた。
- ・大橋:別件として、名古屋テレビ塔の大沢社長から、電力に纏わる資料を提供している赤崎さんを含めてタイアップ事業ができる可能性あり。

3. 研究誌、会報(研究会ニュースレター)

[170-31-01] 研究誌『産業遺産研究第29号』の編集 について/石田正治

従来の募集要項に従って原稿を募集中。詳細を会 報などにて通知予定。

[170-31-02] 中部産業遺産研究会報について/石田 正治

[170-31-03] 会報ニュースレター 電子メール版に ついて/橋本英樹

4. シンポジウム・パネル展・その他事業

[170-41-01] シンポジウム「日本の技術史をみる眼」 第39回 /八田健一郎

テーマ「活かそう身近な産業遺産」

2022年6月19日(日)または、6月26日(日)にて開催を 検討し、下記のように6月26日を開催予定。

1月16日午前、定例研究会に先立ち実行委員会開催 : 天野武弘会員により、トヨタ産業技術記念館の成 田年秀氏と合同で進められる道筋が見えてきた。

3月17日時点で、6月26日(日)午後にトヨタ産業技 術記念館を会場に開催を予定している。

「170-41-02] パネル展と講演会/杉山清一郎

テーマ「ものづくり中部の革新者たち Ⅲ」 開催予定

パネル展:2022年8月23日(火)~9月11日(日)会場 は名古屋都市センターまちづくり広場

*2月1日と2月26日に勉強会を実施。

講演会・定例研究会:9月4日(日)を予定

[170-41-03] ものづくり再発見ウオーキング/山田 富久

2022年3月5日に一宮にて実施で検討中。

(2022/03/05に予定通り開催された。)

※ものづくり再発見ウオーキングは今回限り。

「170-41-04] 出版編集検討委員会/石田正治

レイアウト見本の作成を風媒社に依頼し、4頁立 てと2頁立で人物紹介する案を検討した。

5. 見学会、その他の催し物

[170-51-01]「旧山繁商店(国登録有形文化財)見 学会」(第171回) /事務局

集合日時: 2022年3月20日(日)午後1時30分

集合場所:旧山繁商店(愛知県瀬戸市仲切町・深川

町)13時30分までに直接お越しください。

アクセス: 名鉄瀬戸線 尾張瀬戸駅から徒歩 (瀬戸蔵

ミュージアムから北へ徒歩10分ほど)

※当日、12:30~13:10、尾張瀬戸駅にて大橋公雄会 員が研究会の旗をもって案内します。

大橋会員の携帯電話:090-1095-8302

6. 文献紹介、資料紹介

[170-61-01] 『愛知の昭和30年代を歩く』 溝口常俊 編著 風媒社 2021年

[170-61-02] 『活動レポートNo.3』NPO法人愛岐トン ネル群保存再生委員会発行 2021年

春・秋の愛岐トンネル群特別公開時にその会場で 販売 (500円)

[170-61-03]「KINIAS ニューズレター」近畿産業考 古学会

[170-61-04] 「ニューズレター」東京産業考古学会) [170-61-05]「九州産業考古学会報」九州産業考古 学会

7. 出版広報事業

[169-71-01] インターネット

http://csih.sakura.ne.jp/ 左記です。一度ご覧

[170-71-02] 中部産業遺産研究会の書籍出版事業/ 石田正治

8. 委員会、役員会、研究分科会

[170-81-01] 幹事会・役員会等/事務局

- ・総会前に2021年度第2回役員会を実施予定
- ・必要の都度メールで実施

9. 事務局関係

[170-91-01] 会員異動(なし)

[170-91-02] 2021年度会費納入のお願い

2021年度分の中部産業遺産研究会の年会費につい て、まだ振り込み頂いていない方は、納入頂けます ようお願いいたします。

1. 金額 4,000円

2. 振込口座

三菱UF J銀行 鳴海支店 普通預金 1531266

中部産業遺産研究会 会計係 加藤真司

3. 間合窓口

会計担当 加藤真司 ssmkatou@hm9.aitai.ne.jp

[170-91-04] 書籍・資料等交換会/事務局

会員の不用になった関連書籍や資料を希望者へ引 き継ぎます。

[170-91-05] 研究会スケジュール、関連団体スケジ ュール、他/事務局

■ $2022/03/20(\exists)$ 13:30~16:00 第171回定例研究会見学会

場所(瀬戸市 旧山繁商店)

■ $2022/05/22(\exists)$ 13:15~17:00 第30回総会、第172回定例研究会

会場:とよた市民活動推進センター

第171回定例研究会・見学会の感想 一陶磁器卸問屋建築の魅力と今後一

市原猛志/ICHIHARA, Takeshi

日時:2022年03月20日(日)13:20~16:30 見学地:旧山繁商店(瀬戸市仲切町・深川町)

参加:15名

1月から続く中部圏まん延防止重点措置の解除を翌 々日に控えた3月20日、週末降っていた雨も収まり、 日曜日の晴れやかな日差しのもと、15名の参加者が 集まった見学地は愛知県瀬戸市の国登録有形文化財 「旧山繁商店」であった。

午後1時30分より始まった見学会では、瀬戸市文化 課の佐野元氏による丁寧な解説のもと、明治中期か ら戦後初期にかけて建造された登録文化財建造物9棟 をじっくり見学することが出来た。

人数確認と名簿記入、資料を配付頂き、解説が始 まる。まずこの地域の位置的説明から入ったが、も ともとこの商店一帯が卸問屋や陶工の住宅が集積し ていた土地であり、南側の市街地から人や物が出入 りしていた。西側の旧道にはかつての事務所が設け られ、それが1939 (昭和14) 年に行われた街路整備 に伴い東側の新道(池田通り)側が交通の中心へと 移っていったため、戦後新たに入り口が東側に付: られ、事務所も新たに東側敷地に作られたとのこと。 最初に集まった西側の旧道沿いは、かつての賑わい を示すかのように切石亀甲積みの基礎を持った塀が 巡らせており、正面から見て左右には、意匠的に扇 の形をした石がはめ込まれている。ここだけを見て も非常に贅をこらした建物であったことが推察でき

最初に見学したのは、1914(大正3)年に竣工した 旧事務所と呼ばれる建物で、1階事務室の土間部分を 見学したが、土間に若干の段差の痕跡があることを



[写真1] 山繁商店敷地内で佐野さんの解説を聞く (2022/03/20 筆者撮影)



[写真2] 山繁商店旧事務所

(2022/03/20 筆者撮影



[写真3] 扇形に加工された切石

(2022/03/20 筆者撮影

確認した。これはもともと江戸時代から続く土間から上がり口を設け見世棚があった時代の名残を示すものと言えよう。このような細かな部分はしっかりと伝統を受け継ぎつつも、天井の小屋組は洋トラスだとのこと。大正時代が持つ、和洋折衷建築の典型的な姿なのかもしれない。

次にかつてあった主屋跡と離れに向かう。主屋とほぼ同じ大きさの離れは、迎賓施設としての用途も想定されていたようで、3方周縁部に廊下を配し、4間構成の造りは典型的な和建築の流れを踏襲している。登記年代によると1889(明治22)年に作られ、1911年には梨本宮、1927(昭和2)年には李鍝が来訪しここで応接を行ったという。

更に足を進め、主屋跡の北側に遺る藏を外観から 見やる。参加者から真竹が用いられているとの話も 出て、外壁が剥がれ土壁内側の構造が分かることか ら得られる情報の有益さを改めて感じ入る。

旧事務所東側にある1914年竣工の新小屋の2階に入ると、こちらは基本的に和小屋で構成された建物であった。建物中心からすこしずれた小屋組にはやや首をかしげるところもあるが、古材を使用している故の工夫なのか、なかなか分からないところも多い。

通常の見学会であれば、ここまでで終了と相成るわけだが、やはり工場の部分まで見学しないと産業遺産としての魅力は分からない。戦時中に軍需全場としてネジを生産していたという前倉庫及び留めままの姿を留めままのままの姿を留めまり、基本的なキングポストトラスの天井に両端部が補構されている様がよく分かる。更に北側に歩き戦後の1950年に建てられた奥倉庫は、窯元から送られてきた陶磁器の絵付け作業が行われていたという。ただし、物資不足の中で建てられたからか、トラスに使用されている木材がつぎはぎな為、梁の接合部に柱を入れて補強を行っている。実に危なっかしたりではあるものの戦後の物資不足をまざまざと実感できる、物言わぬ証人といえよう。

最後に戦後の1947年、通称池田通り側に作られた 事務所を見学する。大正時代に作られた事務所から 移されたであろう金庫が入る作り付けの棚はなかな か愛らしく、またこの工場で生産されていた星の王 子さまの陶器サンプルなど、最後まで卸問屋として 使用されてきた雰囲気がそこかしこにあり、これを 活用するにはどうすれば良いのか、なるほどしばし 考えてしまう。充実した見学会であるが故に、自治 体側が求める保存活用のアイデアについて、話題も 膨らんでいった。

ーヶ所の見学会で2時間近く熱心にご説明頂きました、瀬戸市文化課課長補佐兼文化財係長の佐野元様、また説明のサポートを頂きました学芸員の高野夏姫様、そして久しぶりの見学会の段取りを頂きました会員の皆様に心より感謝申し上げます。

第30回総会•第172回定例研究会 案 内

期日:2022年5月22日 (日) 13:00~17:00 会場:とよた市民活動センター 研修室

(松坂屋・A館T-FACE 9 階)

アクセス:名鉄三河線 豊田市駅下車 西口を出て すぐ、または愛知環状鉄道、新豊田駅下車、徒歩3

分。 電話:0565-36-1730

内容:第30回総会および定例研究会では、調査報告、

保存問題、会員の近況、その他。

参加者は、マスク着用などコロナ対策をお願いします。

シンポジウム 「日本の技術史をみる眼」 第39回 案内

期 日:2022年6月26日(日)13:00~16:50 会 場:トヨタ産業技術記念館 ホールA アクセス:名鉄本線栄生駅より徒歩5分。

テーマ:「活かそう身近な産業遺産~先人の挑戦をひ もとき未来に活かす~」

内 容:モノづくりが盛んな中京地区。陶磁器や織物、各種機械や自動車、ミシン、小型映写機、ガス機器、娯楽機器など、現在も産業遺産が身近に多くある。これらに纏わる先人の経験は我々に驚きなど気づきを与える。博物館は、それらに気づかせてくれる。今回は、トヨタ産業技術記念館学芸員の成田氏から展示に込めた想いなどを、杉山会員からは、産業遺産の実証的調べ方の事例を紹介いただく予定である。また、パネルディスカッションでは、豊田市近代の産業とくらし発見館学芸員の小西氏にも加わっていただき、身近な産業遺産の保存と活用について今後の展望を開きたい。

第173回定例研究会案内

期日:2022年7月24日 (日) 13:00~17:00 会場:とよた市民活動センター ホール

アクセス:上記。

内容:研究報告など、受付中。

2022年度年会費ご入金のお願い

- 1. 年会費 4,000円
- 2. 振込口座

銀行支店 三菱UFJ銀行 鳴海支店

種 別 普通預金

□座番号 1531266

回 座 名 中部産業遺産研究会 会計係 加藤真司(かとう しんじ)

※新年度になりました。2022 年度会費を記口座に お振り込み下さい。

■編集後記、原稿募集

■編集後記

新型コロナウイルスは、まん延防止措置が解除された ものの、なお毎日多くの感染数が報告されています。

第172回定例研究会は予定通り開催される予定です。

今号の連載記事は、天野武弘会員の人造石の産業遺産めぐりシリーズは第11回目、石田の海外産業遺産めぐりの旅シリーズは、次回に掲載予定です。ご期待下さい。(石田)

■産業遺産に関する諸情報、短信、文献紹介、ご意見など お気軽にご投稿下さい。投稿は郵送または電子メールでお 送り下さい。写真には必ず撮影者と撮影日時を記載したメ モを貼り付けて下さい。

原稿送付先:石田正治 ishida96@tcp-ip.or.jp 第87号の原稿締切日:2022/06/15

■「中部産業遺産研究会会報」発行予定

第87号 (2022/07/15) 第88号 (2022/10/15) 第89号 (2023/01/15) 第90号 (2023/04/15)



中部産遺研会報 第86号

ISSN 2189-5619

Newsletter of The Chubu Society For The Industrial Heritage Vol.86

発 行 日: 2022年4月15日

発 行 人:黒田光太郎

編集委員:石田正治・橋本英樹・山田貢・大橋公雄・浅野伸一・朝井佐智子

中部産業遺産研究会事務局:

〒463-0088 名古屋市守山区鳥神町194 山田 貢 方

中部産業遺産研究会のホームページ http://csih.sakura.ne.jp/index.html 掲載記事の無断転載を禁じます。

Copyright 2022, The Chubu Society For The Industrial Heritage, All rights reserved.